

徳川

禁令考

幕府

卷十六

ワ 3
951
18

9

和装本

ワ 3
951
18



保
9
卷
18

會同
印政

德

川

禁令考卷十六目錄

法制禁令之部

武家

幕府

法度

第二十二章

宰職長官及諸曹勤方條目之三

作事奉行

普請奉行

小普請奉行

陸軍奉行

騎兵奉行

騎兵頭

砲兵頭

銃隊奉行

銃隊頭

德

本

卷十六

目錄

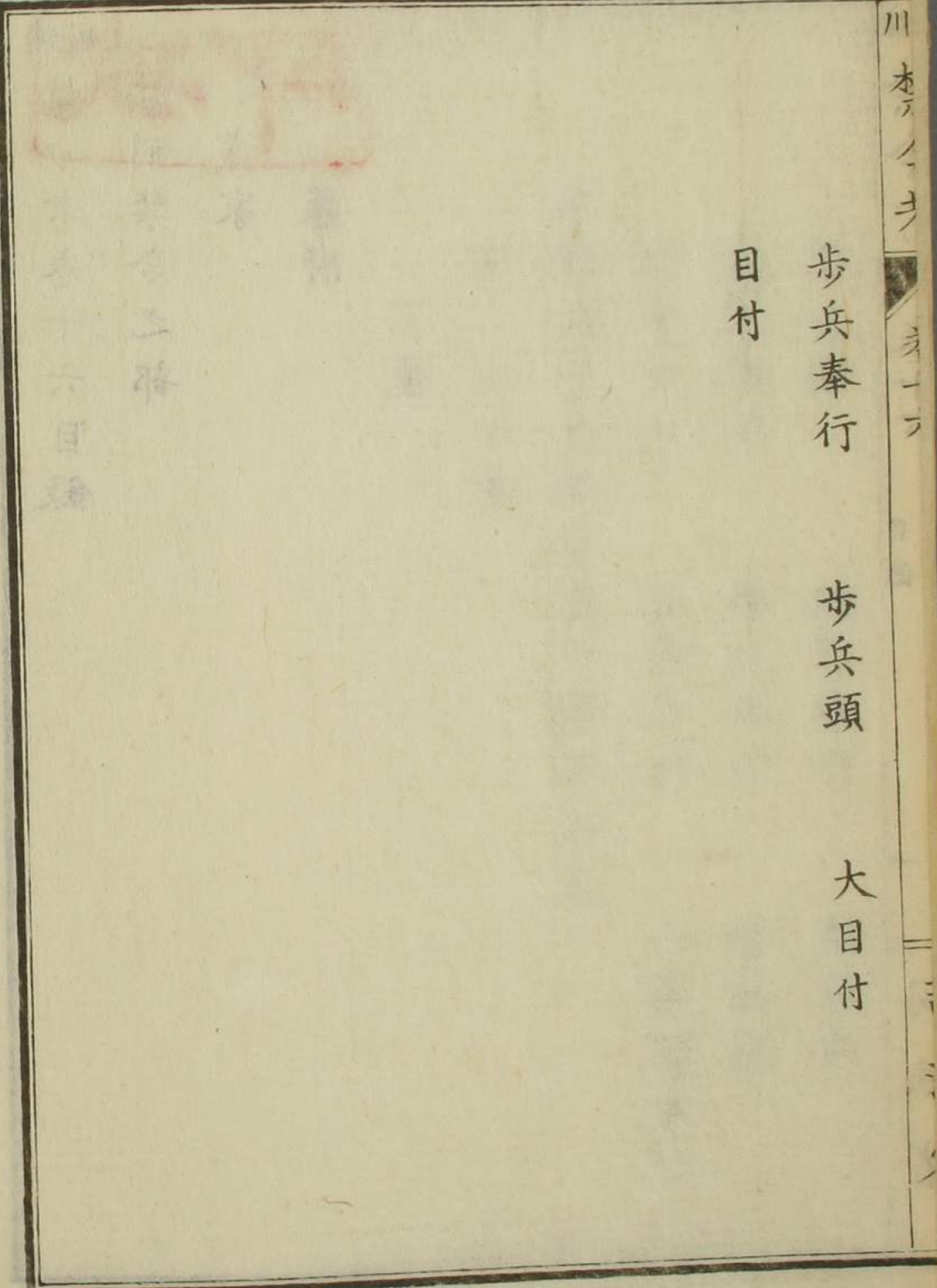
一

司

法

省

步兵奉行
步兵頭
大目付
目付



德川禁令考卷十六

菊池駿助纂修

法制禁令之部

武家

幕府

法度

○第二十二章

宰職長官及諸曹勤方條目之三

○作事奉行

累代武鑑ニ寛永九年十月十三日佐久間河内守酒井因幡守此職ニ就テ尋テ寛永十五年十一月神尾備前守之ヲ命セラル已下列負數十名ヲ舉ケ文久三年十二月十五日ニ任スル岡部駿河守ニテ歇ム

制令

條々

- 一 下奉行御披官并諸色之棟梁申付儀少も相背るのら以但人足又者諸職人相揃刻限ハ可為六ツ時退散者下奉行可任差圖事
- 一 御材木遣所念入る下奉行御披官之差圖なく一て長木切捨申間敷事
- 一 釘鍔萬金物遣所下奉行御披官差圖を請不入所遣間敷事
- 一 小屋場火之用心堅可仕之自然小屋場近邊火事令

出来者其近所ニ在合輩馳集火を消可申事

- 一 釘くまハ大工取る木切分ハ一圓取申間敷事
 - 一 御作事之諸色取へら以ぬま取との於有之者急度曲事可申付事
 - 一 御普請中役所番之者萬事入念可申事
- 右可相守此旨於違背者可被處嚴科者也

七月

延寶二甲寅年十一月 關日

制令

條々

一 御普請場廻まおゐて竹木を伐ころ屋わくを勿論
 差圖なくして堀之屋うらさ事
 一 地形場まおゐてちりほくと其外雜物をてはらき
 事

一 御作事場へ用所無之もの一圓出入仕間敷事
 右可相守此旨若於相背輩者可為曲事者也

十一月

一 以上引書。嚴制録一圓取申間敷事

元禄十丁丑年閏二月十九日

大立候御普請 小細工方廢止ニ付向後勤方定書

作事奉行

小幡三郎左衛門江

覺

一 御作事方ニ而ハ御當地并遠國共ニ大立候御普請
 遠國寺社共ニ御用可承事

一 御材木方御疊方植木方繪師大工

此外有来支配之分唯今迄之通り可仕事

一 御小納戸御用御道具小普請奉行ニ而可仕候破損

御修復も同前之事

一 御風呂屋方御道具品々并御修復同前之事

一 表御膳所并御臺所御賄方御道具品々破損御修復同前之事

一 表御座敷御用御道具品々同前之事

一 大廣間遠侍御改御掃除御修復共二同前之事

一 御數寄屋御水屋度々取立并同所破損御修復共二同前之事

一 大奥方御道具品々其外破損御修復并部屋方道具品々且又破損修復同前之事

一 方々御番所御道具品々新規御修復共二同前之事

一 二九御道具品々御鳥籠破損御修復同前之事

一 西丸神田御普請小屋品川御殿逢坂御用屋敷四谷御用屋敷評定所御用道具同前之事

一 五月より八月迄所々御宮御佛殿御掃除改共二同前之事

一 増上寺御裝束所改破損御修復共二同前之事

一 植木方黒鋏方御掃除方御道具同前之事

一 小石川御殿御道具并御放鳥之籠度々取立新規御修復共二同前之事

- 一 山本藤右衛門佐原十左衛門方御鳥籠并ゆたん新規御修復共ニ同前之事
- 一 方々下馬札高札御堀札共ニ同前之事
- 一 地割方御用之地札同前之事
- 一 御厩方御道具同前之事
- 一 御城中御殿唯今迄小細工方より仕来候御普請御修復共ニ向後不殘同前之事
- 一 御材木藏御用之道具ハ御材木奉行方ニ而可仕事
- 一 御疊小屋少々修復并御疊之御用ハ御疊奉行可仕事

一 小細工方ニ有之儀向後相止可申事
 附小細工小屋も相止勿論小細工方役人も相止可申事
 右之通相極候間向後可被守此旨候以上

享保三戊戌年五月廿五日

土木部主務分科達書

按ニ此達書ニ云フ奉行ハ皆土木營繕ヲ掌ル然レ其事務ハ各分轄アレハ面々主務ノ項ヘ其令書ヲ收ムヘキモ指令或ハ連署スル此條ノ如キ者ハ今之ヲ分截シテ其踪ヲ漫ル可ラス仍テ其班次ノ首職ニ置ク爾後如此モノハ皆之ニ倣フ

御作事奉行方

一 御本丸外廻り御座之間邊より表向御座敷廻り但御座敷内者別紙繪圖ニ仕候

一 御臺所前三重御櫓より南之方御細工所御銃炮部屋御長屋御門中之口前御多門より御玄關前御門迄

一 御風呂屋口前御多門より北之方御廣敷前二重御櫓御門迄

一 御玄關前より御書院番頭部屋同所二重御櫓御多門臺部屋御多門下埋御門迄
一 富士見御櫓より續堀上埋御門御舞臺御樂屋富士

見御番所御寶藏御數寄屋前御門御櫓御多門堀大奥境迄

一 中之口門より銅御門同所大番所大手三之御門并升形之内御多門下乘檣張番所同所腰掛迄

一 百人組御番所より後通御多門御櫓蓮池喰違御門御金藏御厩同所御櫓御多門蓮池御門并御内續堀坂下御門迄

一 内櫻田御門より内腰掛大手御門續堀三之丸喰違御門下御勘定所并後堀通
一 西丸表向

但御座敷之内并西丸より山里邊迄御作事方小
普請方雙方割合別紙繪圖ニ仕候

- 一 奥表境土戸より南之方土手上塀御長屋御門御玄關前御門并續御多門御櫓山里塀紅葉山境迄
- 一 山里御門より并塀的場曲輪吹上御門獅子口中仕切御門大手御門迄以上城中

小普請奉行方

- 一 御本丸大奥銅塀を限り但大奥向者一紙繪圖ニ記
- 一 二丸三丸者内外御座敷廻り迄不殘
- 一 二丸御殿并塀重御門之内御多門御櫓不殘喰違御

門迄

- 一 下梅林御門上梅林御門并續御多門御櫓北跳橋内
- 一 二重御櫓北跳橋御門御天守御門乾御櫓御多門塀西拵橋續大奥境迄
- 一 西丸大奥向不殘
- 一 西丸御裏御門より同所御眷屋太鼓櫓并塀奥表仕切引戸迄
- 一 紅葉山御宮御佛殿御供所御寶藏并總御圍紅葉山下御多門より御宮後通り御構塀山里境迄

御作事方

上野御宮總御佛殿并御別當本坊學頭此外山中御
 修復所々社堂等 神田橋御門 常磐橋御門
 吳服橋御門 鍛冶橋御門 和田倉御門
 馬場先御門 外櫻田御門 數寄屋橋御門
 日比谷御門 一ツ橋御門 竹橋御門
 雉子橋御門 清水御門 田安御門
 半藏御門 馬場曲輪御番所 筋違橋御門
 淺草御門 小石川御門 牛込御門
 市ヶ谷御門 四ツ谷御門 赤坂御門
 虎之御門 幸橋御門 山下御門

芝口御門 昌平橋木戸御門 水道橋
 赤坂喰違木戸門共二 新橋木戸門共二 火消御役屋
 本所御材木藏 本所奉行會所 小細工小屋
 三浦壹岐守御預り御櫓 御奥小屋
 所奉行御役屋敷三个所 聖堂
 山王御宮廻り 此外御修復 五拾三个所
 增上寺安國殿御佛殿并別當本堂此外山中御修復
 所々堂舎等 濱 御 殿 吹上御花畑
 月光院殿宅 竹姫君様御屋形 壽光院殿宅

小普請奉行方

法心院殿屋敷 蓮光院殿屋形 清心院殿屋敷

御 眷 屋 高倉屋敷 傳奏屋敷

評 定 所 櫻田御用屋敷 田安御用屋敷

神田橋外御用屋敷 二丸御用屋敷 小川町小石

西丸下御用屋敷 御花畑奉行 紅葉山坊主御役

駒込御鷹部屋 御藥園并御 屋敷十二个所

駒場野塩硝藏 竹橋御藏 小普請方定小屋

深川御船藏 番人居宅共 小普請方定小屋

御修復願出候節吟味之上可申付場所

五拾三个所

淺草寺 東海寺 御作事方

傳通院所御佛殿 金地院 神田明神

幸龍寺御佛殿御修復願候節者右之通可申付哉此

外神社寺院并所々橋下水溜等之儀前々小普請方

而仕候所々御座候此等之儀者至其節吟味仕伺

之上御作事奉行小普請奉行江割合可申付候

五月廿五日

右之趣享保三年戊五月廿五日向々江被仰渡相渡

候之由但井上河内守殿御作事江被仰渡候

按ニ此文ハ歲月ヲ掲ケス然レモ文辭ニ依レハ亦夕官府ニ在ル者ノ言ナリ豈ニ傳聞スル所ヲ追記スルモノ乎

以上引書〇教令類纂

寛政元己酉年十一月 關日

作事奉行附屬吏員及扶持方ノ定

御作事方定普請同心之儀是迄定人數七拾九人ニ
 候處以來七拾壹人ニ相定八人相減可被申候
 一 御大工頭内抱使役之儀家来ニ而間ニ合可申旨申
 聞候得共是迄四人有之候儀ニ候間右減高之内

々以拾貳俵壹人扶持宛貳人分被下候間使役壹人
 宛定人數之外自分ニ而内抱致候様可被申渡候
 一 定普請同心組頭之儀是迄役給モ無之儀ニ付以來
 壹人江拾俵宛為役給右減高之内を以被下候
 一 定式諸場所相勤候定普請同心共江右減高残り三
 拾貳俵と六人扶持を以相應ニ割符いたし相渡為
 相勤候様可被致候

十一月

引書〇御觸書

寛政四壬子年十一月 關日

普請向都而作事奉行江可申出旨達書 按=此達書ハ

大目付ハ降ルモノ大目付之ヲ作事奉行ハ達スル順次ナレ
氏其達今存セス故ニ之ヲ主務ノ歸スル所ニ就テ此ニ收メ
以テ捷知ノ
便ヲ為ス

大目付江

都而御作事方小普請方持場御修復所小破之儀ニ
而も向々より書面差出主役々々江相下り候得共
御破損所之儀ニ候間主役々々江以来向々より直
ニ書付いたり相達候様可致候新規之儀者是迄之
通書面支配限可差出候御修復新規之儀共主役ニ

而難心得儀者伺之上取計候様申渡一置候御疊之
儀部屋之分者御作事奉行江之斷書可被差出候御
座敷向且御靈屋向等都而御參詣前祭事前等ハ見
分之儀御作事奉行江可被達候
右之趣向々江寄々可達置候
十一月

享保元辛酉年八月廿五日

諸向役所ヨリ作事奉行江届書ノ儀ニ付達

按=此書ハ宰職ヨリ監察ヲ以テ諸局事務ノ遅緩ヲ
督促スルモノ其要ハ作事奉行ニ歸ス仍テ此ニ收ス

諸向役所部屋々々御疊替願并御作事奉行江斷書
十月初より十一月中旬迄差出候様去々子年相達
候得共今以遅々いたし候向も有之候依之以来者
八月より十月中旬迄は申立遅も十月中限勿論以
後は相成候分者翌年迄差延候等ニ候
右之趣攝津守殿被仰渡候依之申達候以上

八月

松平田宮_{目付}

以上引書。御書付部類分

文久二壬戌年六月十六日

改正支配向ノ儀ニ付達書

御作事奉行江

此度御改革被仰出候ニ付御普請奉行小普請奉行
不殘御役御免勤仕並被仰付跡役者不被仰付候間
小普請方御普請方之者共一同引受支配向同様可
被取計候尤小普請方御普請方之者共江も其段可
被申渡候

六月

引書。御書付留

○普請奉行

累代武鑑ニ此御役ハ往古ハ御使番又者兩御番ヨリ
 臨時ニ被仰付歟承應年中ヨリ本役寛文中ヨリ美
 蓉之間寶永年中ヨリ諸大夫役同八年中諸大夫ニ被補トアリ其
 職負ヲ列スル元和三年九月任スル伊東右馬允ヲ初トシテ文久
 元年九月ニ任スル大久保大隅守マテ數十名アリ其尾ニ當御役
 ハ文久二年六月廢止ニ相成ルト誌ス○柳營秘鑑稱其掌職專理
 處曰地割御堀石垣土居明屋敷留守の構無ハ其近邊之大名在府
 役人其譯申來レテ方留守居其餘役候而家作立具樹木石連相奉行方
 家主之合請取奉レ勿論中へ其趣相候而家作立具樹木石連相奉行方
 面引合請取奉レ勿論中へ其趣相候而家作立具樹木石連相奉行方
 八二石高明和五年ヨリ初テ兩上水道路ヲ兼役ス

支配向

下奉行改役普請方假役同心肝煎同心地
 割棟梁○官中秘策 柳營秘鑑

寛永十二乙亥年十一月十一日

土木部事務統領令條

按ニ前ニ置ク第十四卷老中諸
 役人分職ノ章第十條ニ此款ア
 リ書體稍異ナリ且ツ末文然ルニ此條ヲ裂テ別集ニ見ルハ
 豈ニ撰者ノ意ニ出テ其類ヲ分セル歟蓋シ條中ノ三名ハ當

時若年寄ヲ奉職シテ即チ此項ノ總司タルヲ以テ此ニ收ム
 但文中普請小普請道三奉行ヲ連稱ス分截スヘカラス故ニ
 其班次ノ首ニ
 之ヲ置ナリ

一 目安裏判之儀其役々可仕事

一 御普請奉行小普請奉行道奉行御用之儀

- 松平伊豆守
- 阿部豊後守
- 堀田加賀守

可承之但大造之御普請并大なる屋敷割之儀者可
 遂相談之事 柳營秘鑑曰大造之普請ハ堀川石垣地形
 御作事家作堀門堂塔御造營修復等ナリ

十一月

引書○教令類纂

寛永十三丙子年正月八日

制令 江戸總堀石垣

普請之時條目

- 一 喧嘩口論堅く制禁之訖若有違犯之族者不論理非
雙方可處斬罪勿論令荷擔者其咎可重於本人事
- 一 附於何事申分有之者普請以後可及沙汰たといへ
道理ありといへとも申出る輩者可為曲事事
- 一 自然喧嘩口論火事有之時一切其所江不可馳集事

- 一 普請之組頭對組中萬最負偏頗不可致之若他之組
と論所之儀或ハ組頭取持之或ハ荷擔或ハ組中企
 - 一 一味惡事不可有之事
 - 一 不可論石置場事
 - 一 猥不可伐取山林竹木并不可荒作毛事
 - 一 押賣押買諸事狼藉を爲るゝさる事
 - 一 人返之儀停止之於有申趣者普請相濟可沙汰之但
重科之人者達普請奉行可任其差圖萬事不可致私
之出入事
- 右可相守此旨をの也

寬永十三年正月八日 御朱印

寬永十六己卯年九月廿六日

制令 江戶本凡普請之時條目

條々

- 一 喧嘩口論堅制禁之訖若有違背之族者不論理非雙方可處斬罪勿論令荷擔者其咎可重於本人之事
- 一 於何事申分有之者普請以後可及沙汰假令雖有道理申出輩可為曲事事
- 一 自然喧嘩口論火事有之時役人之外一切其所江不

可懸集之事

- 一 押賣押買諸事不可狼籍事
- 一 人返之儀停止之於有申趣者普請相濟可沙汰之但重科之人者達普請奉行可得裁許不可致私之出入事

寬永十六年九月廿六日

明曆三丁酉年五月九日

制令 天守臺銅門梅林門與仕切等石垣其外普請

條々

一 今度普請中於何事申分有之者普請相濟可及沙汰
 縱令雖有道理申出輩可為曲事事
 一 喧嘩口論堅制禁之訖若有違犯之族者不論理非雙
 方可處斬罪勿論令荷擔者其咎可重於本人萬一喧
 嘩火事有之時役人之外一切其處へ不可馳集事
 附不可押買狼藉事
 一人返之儀停止之於有申趣者普請以後可沙汰之但
 重科人者違普請奉行可受裁許不可致私之出入事
 右可相守此旨其外諸事得普請奉行之差圖可申付者
 也

明曆三年五月九日 御黒印

以上引書。嚴制録

右ハ普請奉行ノ曩時董役スル令條ヲ收タルモノナリ抑此令條ヲ諸記
 ニ獲ルモノ凡テ七則寛永十三年同治十六年正保四年慶安三而シテ正保
 慶安ノ令條ハ寛永十六年同治十六年寛文五年ノ令條ハ明曆ト一ナリ故ニ
 同ヲステ異ヲ採リ以テ其冗長ヲ省ス爾後土木ノ舉マタ多シ弊不作事
 奉行小普請奉行ニ屬ス故令條皆其項ニ收ム蓋シ普請奉行ノ主務ハ掘
 石垣土居等ノ建築ヲ掌ル而シテ寛文以後此役大舉ナシ是令條ヲ見サ
 ル所以ナリ然レモ其常務ハ尚ホ地割明屋敷ヲ支配ス後チ明和五年ニ
 至リ府下道路并玉川神田上水樋拵繕治浚造ヲ兼ネ司ルヲ擔任ス然ル
 ニ此二課ハ元ト各奉行アリテ屢々變更ス其顛末ヲ知ラサレハ條理達
 セス仍テ要領ヲ左ニ録ス

普請奉行ノ原由

元和二丙辰年十月江城北神田之堀鑿土手築
 御使番阿部四郎五郎正之監之。慶寛私記。○按ニ
 此時

川
禁
令
考

ヨリ神田溝ニ流水ヲ通ス後チ萬治三年ニ至リ松平陸奥守へ教
ヲ降シ壅砂ヲ浚疏シテ壯流トナルト云源御普請奉行ハ往古ヨ
リ御使番兼役タリ
承應元年ヨリ定役

府下道路水道監理ノ創置

元和四戊午年正月阿部四郎五郎正之奉て江
戸御城下の道路を巡見一水道を沙汰す。慶寛
私記

玉川上水ノ原由

承應二癸巳年正月玉川上水を都下ヨ引ゐる

○泰平年表 ○按ニ此回玉川ヨリ長溝ヲ鑿チ江戸へ達シ流水ヲ
引キ府内一般ノ飲料ニ充ルト云フ此項監理スル

官アルヲ傳ヘス前ニ
掲ル阿部氏ノ輩乎

道奉行ノ創置

明和五年ニ至テ止ム其迹ハ後

萬治二己亥年八月頃より道奉行始る新御番

大御番出役。慶寛私記 ○按ニ道奉行ハ此回ヨリ相續テ

條ニ舉ク就
テ知ルヘシ

寛文六丙午年正月

上水奉行達書

神田 両上水奉行 速水與次右衛門
本所 芦原十兵衛

但上水御用之儀候ハ、兩人江可參事

玉川上水奉行 奥津孫助
永尾喜太夫

右同斷 ○撰要永久録 ○按ニ此回ヨリ置官已ニ明カナ
リ其職務モマク事跡アリ之ヲ

得テ次條ニ置ク神田上水戸距ルノ
ニ之ヲ視ル通シ玉川上水ト一般城ル
ナ内西目
リ外北此
本へ數ニ
所引キテ
上上キシ
水ノ民テ
ノ説ハ汲
後飲リ由
條ニ充井
置ソノ頭
ト故

徳
本
六
八
考

卷
二
六

普
請
奉
行

十
八

法
省

川
本
冬
九
卷
十六

元禄八乙亥年六月

玉川上水道普請諸入用高割書

按ニ神田上水ハ此時都テ官

修繕諸費ヲ辨給ス寛延二年ニ至リ此上水ト同規ニナル其達書アリ後條ニ收ム參觀スヘシ

玉川上水道

是ハ赤坂紀伊國坂大戸樋溜池端石垣戸樋溜池廻リ大戸樋修復并竹箕蓋普請入用

金八百三拾兩餘

十四分

金七百七拾八兩餘

諸大名本より出る

壹ツ分

金五拾五兩餘

町方より出る

此割付百石ヨリ三拾萬石以上マテ割付詳載ス要ナラサレハ畧ス

右入用割合前々より如此之割付之由水道奉

行より申来候。御定書

○按ニ此項ヨリ水道ヲ護視スル年ヲ追テ緊嚴ニ向テ正徳年間

ニ至リ沿路へ禁令ヲ標示ス左ノ如シ

正徳三癸巳年八月

上水道高札

玉川 天龍寺千駄ヶ谷四ツ谷大木戸極堤よ
上水道 赤坂溜池廻り紀伊國坂迄十一ヶ所

定

はとあるゆかゝるて魚多ととりあをあひちり
あくたをすておやあらふ輩あらハ曲事たる
るきもの也

八月

徳
林
八
考

卷
十六

普請奉行

十九

司法省

川
有
等
夫
者
也

玉川
上水道
代々木村より高井戸まで六个所

定

- 一 以上水乃小おるて魚香をとりあをあひちり
- 一 あくたをすておとあらふ魚をらさる半
- 一 上あ乃小あヶ橋三間通りを来下草苗木一切
- 一 さりどるまーき事
- 一 一あヶ橋三間通りの内人馬通るまーき事
- 一 右條に於相宵志曲事たるるるき者也

八月

神田
金杉橋際
村服部坂下音羽町橋際
大六天前小日向
關

上水道

大洗堰
曾我周防守屋敷前高田橋際下落
合村橋際戸塚村橋際

以上あ乃小おるて魚香をとりあをあひちり
あくたを捨る事あらひ曲りたるるるき者也

八月○教令類纂

右両上水ヲ護視スル如此蓋玉川上水ハ其肇メ官ニテ鑿ッ所其説
前ニ掲ル如シ神田上水ノ溝ヲ通スル何レノ時ニ肇レテ傳ヘス按
ニ其水源井ノ頭ノ隣地ニ故ノ千川用水ノ廢溝アリ今上野堀ト云
享保七年八月之ヲ廢止スル達書ニ曰千川用水之儀中興よりか
り候事ニ候故自今相止候間向々江可被相達候此回青山三田兩所
及ヒ前達書ニ云フ本所上水モ廢止ス其文並ニ中興之事故自今相
止候トアリ類纂○今マ廢止ノ件ヲ察ルニ享保七年四月儒官室新助上書シテ江
テリ用水ヲ引クニ溝ヲ穿テ地カ引テ諸水道ヲ廢セシト其説ハ明暦年中ニ江ノ各西
テハ中興トハ明暦ハ火災ノ後ニ由レハ神田上水モ同時ニ水道ヲ通シ江ノ引
クモノトス然ルニ其清流ヲ萬衆汲飲ニ充ルヲ以テ諸用水廢溝ノ

徳
本
卷十六
普請奉行
二十
司
法
省

川上水ト同フス

時ニ當リ帝ニ廢セサル而已ニアラス今ニ至テ修繕續密ナル一玉川上水ト同フス

元祿六癸酉年七月十三日

道奉行兩水道支配兼務市中へ達按ニ此前ハ別ニ水道奉行アリ此回ヨリ道奉行ニテ上水浴路ノ後疏修繕モ兼務トナル町奉行ヨリ之ヲ市中へ告布ノ當時道奉行へ達書アルヘシ今存セス故ニ之ヲ收テ其来由ヲ掲ク

神田上水玉川上水兩水道共道奉行衆御支配被仰付候間向後水道之儀ニ付御訴訟仕候儀有之候ハ、道奉行衆江申達御差圖ヲ請可申候此旨町中不殘可相觸候

七月〇大成令

享保五庚子年七月九日

道奉行改革達書

新規道奉行御小性組二人出役二年宛可相勤旨三拾人扶持被下之

右元新御番大御番之定此度改ル

按ニ道奉行ノ改革アルハ此回其家格ノ等ヲ換ル迄ニテ職務ハ先規ノ如ク玉川神田上水ヲ兼務シテ監護ヤリ然ルニ元文四年八月二日ニ至リ町奉行ハ右兩水道ヲ支配シ道奉行ハ道ハカリ支配可致旨達アリ即チ項ヘテ奉其一日ヲ隔テ同月三日最前玉川神田上水道修繕ヲ負擔スル者ハ譴責アリシ由其頃ノ遺記アリ曰玉川正右衛門玉川清右衛門此二人玉川ヲ家稱ニスル由緒右之者共上水請負罷在候處年々相滞リ諸人及難儀此段者畢竟不精成故之儀ニ候依之閉門被仰付候玉川上水神田上水之儀向後町奉行之支配被仰付録條又同月曠水道支配之儀ヲ達書アリ名主長瀬川伊左衛門名主茂兵衛右衛門江向後上水御用可相勤旨尤町年寄三人差圖ヤ

德大八

卷十一

普請奉行

廿一

法

省

川
卷十六
請玉川上水相違無之樣可仕旨被仰付候一右之通玉川上水町奉行
所之支配被仰付候ニ付町年寄三人以來上水支配可相勤旨依之御
扶持方七人分宛被下置候類又町奉行へ町年寄ヨリ出ス舊記ノ
騰書ニ曰町年寄樽與左衛門奈良屋市右衛門喜多村彦右衛門先年
上水掛相勤候節百俵被下候儀三人同斷明和六年ニ止ミ候事○此
數條ヲ勘スレハ前ニ云フ所符合ス其給員稍異同アルモ要スルニ
上水掛ハ元文中ヨリ官令ヲ受ケ相續テ明和六年ニ至テ止ムモ
トス然ルニ同年普請奉行ヨリ年番町名主共へ申渡アリ曰玉川
上水水役請負名主茂兵衛伊左衛門神田上水水見役町人源六作兵
衛此度役筋請負共相止候事録久憶ニ明和五年ハ普請奉行へ水道
道方ヲ管理ノ新命アレハ同六年改革アリテ此令ヲ施行スルト見
ヘタリ且前諸達ノ名主兩人請負文ニ神田上水ヲ言ハサルハ此申
渡ニテ其上水ニモ別ニ水見役二人アルヲ知ル唯起原ヲ傳ヘヌ姑
ク其跡ヲ推セハ此亦元文年間ニ置ケモノトス

寬延二己巳年十一月

神田上水沿路費給割合方

神田上水大洗堰より三河町一丁目河岸石垣

并木樋等従古来公儀御入用を以御修復有之
候得共當七月晦日以来玉川之通御組合普請
ニ相成候間自今新規修復共町方ハ小間貳間
ニ付高百石之積り割合出銀有之事ニ候尤武
家方江も此度右之趣申渡候條此旨可被相心
得候

十一月○撰要永久録

右神田玉川上水并道方来由諸官變更ヲ録ス

明和五戊子年九月五日

徳木

卷十六

普請奉行

廿二

法省

川
普請奉行
卷一六

普請奉行水道道方掛新命并舊負免職、達

按ニ普請奉行ノ職掌此ニ於テ町奉行ノ兼勤スル神田上水
玉川上水路ノ保護及ヒ両番士ノ課勤スル都下道路ノ修理
ヲ擔任ス屬官ヲ増加シテ
一僚眉目ヲ新ニスト云

町奉行 依田和泉守

上水方御免唯今迄骨折候ニ付賜金五枚時服三

御小性組 小笠原權九郎

御書院番 久能伊兵衛

道奉行御免唯今迄骨折候ニ付賜時服三宛

御普請奉行 長田越中守
久松忠次郎

上水道道方御用掛被命新規下奉行二人改役四人

同心十人被附

御目付 大岡主水正

御勘定吟味役 川井次郎兵衛

上水方掛被仰付

九月

引書○泰平年表

寛政三辛酉年十一月六日

神田玉川上水組合出金ノ儀達

神田玉川両上水組合出金之儀只今迄月番之御普

德
水
宗
令
考
卷一六
普請奉行
廿三
去
省

請奉行江相納來候得共以來組合有之分者組合年
番ニ而取集御普請奉行月番江可被差出候勿論銘
々出金遲滯無之様可被致候尤組合無之面々出金
ハ是迄之通相心得可被申候
右之通向々江可被相達候

十一月

引書。憲法類集

文政十一戊子年三月廿三日

水道筋修復ニ付普請奉行通知書

按ニ明和年間
普請奉行當職

ヲ承ル以後ハ事跡ヲ見ス其簿帳ニ載スル所他ニ傳
ハサル乎今其一ヲ得テ茲ニ收メ以テ大抵ヲ示ス

町奉行衆

御普請奉行

尾張殿一手持玉川上水幸橋御門外二葉町樋拵修
復ニ付明廿四日より廿九日迄晝之内水留致一候
尤御成并雨天者日送り之積此段水下之町々年番
名主共江其御役所より御申渡有之候様致一度存
候依之御達申候以上

三月廿三日

文政十一戊子年四月十二日

德

大

卷下六

普請奉行

廿四

去

省

川
禁
公
共
一
六

水道堀浚ニ付停水ノ趣市中へ申渡方通知
書

町奉行衆
御普請奉行

神田上水向堀通藻刈并所々出洲浚いたし候ニ付
明後十四日より日數二日明ヶ六時より暮六時迄
致水留候尤夜水者相掛雨天者日送り御成有之候
得者は又日送り之積り此段牢屋敷并水下町々年
番名主共江も其御役所より御申渡有之候様存候
依之御達申候以上

四月十二日

以上引書。御書付留

文久二壬戌年七月廿三日

普請奉行廢職ニ付達書

此度御普請奉行御差止ニ相成御作事奉行支配ニ
被仰渡候得共御普請方御役所之儀者是迄之通被
建置候間諸事先格之通可被相心得候

七月

引書。撰要永久録

德

水

卷十六

普請奉行

廿五

法

省

○小普請奉行

累代武鑑ニ此役負享二年小菅伊右衛門與頭ナリ
其功ニ依テ諸大夫ニ被任元祿十四年ヨリ小普請
奉行ト號ス正徳二年ニ止ミ小普請方計ニテ勤々享保二年更被
仰付諸大夫役ニナリ文久二年六月十五日當御役廢止ニ相成ト

支配向

小普請方改役小普請方吟味役同吟味手
傳役小普請方伊賀者組頭小普請方手代
組頭同改役下役組頭明屋敷番伊賀者小
普請方伊賀者同手代小普請方改役下役
小普請方伊賀者同手代小普請方御掃除之者組
頭同御掃除之者○役人班

寛文元辛丑年五月廿二日

小普請奉行ノ條目

一 小普請方修復又者新規之造作等萬事費無之不遲

滯鹿相ニ無之様ニ可被申付若難計儀者御留守居
衆御勘定頭遂相談可致沙汰其上猶落着難仕儀於
有之者老中迄可被伺申事

附御城中御城外切々見廻り小破之時修復可被
申付事

- 一 小普請之役人町場等割渡之儀無依怙最負善惡之
場所人足員數以下相考正路可有沙汰事
- 一 御材木石瓦銅鍍疊繩竹其外諸色御普請上中下と
相考相應ニ可被申付并大工壁塗等ニ至る迄上中
下と入屋き處と考可被用之事

一御普請道具場所江相届候儀前廉遂吟味可取寄之
俄ニ持運ヒ大工木挽等不待居様ニ心掛船之運送
者兼日潮時ト考諸事無遲滯可被申付事

一以入札申付之御普請日傭人足等前廉請人以下慥
成者ト撰ヒ相定請負之以後者縦何篇之訴訟仕ト
いふトも不可取上萬一道理至極之儀於有之者其
趣老中江相達可被得差圖事

右條々可被相守此旨者也

公儀御法度ヲ按スルニ明年十二月十五日右之條目ニ尚又二條ヲ增加
シテ下付セラル左記ノ如シ
増加ノ二條

一奉行十人之内五人宛隔年ニ小普請之奉行相
勤之五人者御勘定ニ掛り嚴密ニ可被遂結解
事

一同心之者共常々遂吟味無作法私欲無之様ト
入念可被申之事

寛文二寅年十二月十五日 老中

小普請奉行中

寛文元癸丑年六月
同上

一 徒跡々如被相定手代并拾貳組觸以下奉行小屋場
江相詰候儀同勢之刻限等末々迄猥ニ不成様ニ堅
可被申付事

一 新規ニ建候御家之儀者不及申破損修復仕様之儀
御普請上中下之位前廉能々被遂吟味相應之品ニ
相極其上取付候様ニ可仕事

一 總而御作事ニ付諸材木等遣之儀其處之相應を能
々相考時間致吟味書出可被申候おもてむきニ
ても無之處へハ節木を遣松柏其外雜木ニ而も不
苦處へハむきと檜木を遣不申様ニ可然事

一 御材木藏ニ有之材木ハ請取遣可被申候若少々寸
間相違仕候而も置候程朽損後ニ御用ニ難立材木
候ハ其段被遂相談其上請取遣候様ニ可然事
一 敷居鴨居其外短くきり又ほそく引こり遣候處へ
少も大成材木不遣様ニ尤ニ候事
一 檜木屋根ニ遣候時壹坪ニ付何町ふきと跡々より
定来候共ぬき様ニより少宛ハ相違も可有之間折
々ため一ふきと致させ可有吟味候其家之相應を
被相考ふき何吟味尤ニ候井戸かじ等ニ遣候も
右之心持可為同様事

一 釘鎖其外諸色ら物之儀誂申候時之寸尺ニ請取
申時分ニ相違無之様ニ可有吟味勿論其遣所負數
第一せんき肝要ニ候事

一 萬ぬり物之儀御藏之漆請取遣申候儀ぬり來候上
ニハ入用積志き急可申候間前かと能々可有詮議
事

一 諸石并小買物等之儀品々よ候間銘々被致吟味其
善惡之位代付ニ引合被相考候儀第一可為肝要直
段安く候而も其もの役ニ難立物可有之又とさら
よても不苦物結構ニ致し高直成ハ彌不可然候其

相應之しけ能々可有吟味事

一 壁普請之儀第一の屋下地をさらふ致しあらくら
き候ハ土多つき候故干兼候下ぬり志かと干さ
り不申内中ぬり致し又上ぬりをも仕候故下地之
繩くさりをやく壁損申候繕之儀ハ彌以右之通り
候ハ頓而令破損候間此段能々可被入念事

一 諸色入札被申付候儀様々仕様有之由ニ候間別而
可被入念不寄何事その品々成程委細もくろ之
書付出一置何月何日參うつし候ハと町中申ぬき
置當日能々ら法させ借又入札之日限い法と相定

入札持參候様ニ申渡し入札ひらき申儀請人明鏡
ニ存候様ニ致し札を開き落札吟味仕其上請人以
下せんさく可有之入札仕候者共申合札を入候由
ニ付縦壹番貳番三番四番札迄も以けさせ五番札
江落候やうニ仕候由ニ候間むさとよけ札不入や
うよ前かと能々可被入念候入札之仕様札之ひら
きやう杯惡敷候へハ出入も有之又其奉行人と
たろひ申儀も可有之間成程吟味尤ニ候事
一材木石瓦壁其外何ニ而も御藏又者脇々より取寄
申儀至其日ニ人足積り致し遣し候へハ第一おそ

なまり其上人足つひニ成候間前日人足之積り
能々吟味致しそまくりを極其日ニ至而無遅
滞運送仕候様ニ可仕候船ニ而取寄候ものハ塩時
塩時即日
夕時下同惡候てハ不成ものニ候間是亦前日より塩
時を相考人足以下費無之様ニ尤ニ候事
一役人足之儀ハ方々の所つまりもの故情とも不出
躰ニ相見へ申候間手代之儀ハ不及申ニ下奉行杖
洗きよ能々被申付油断無之様ニ洗ひ可被申候
又渡一切被申候而も可然候洗ひやう手廻り惡
候而者人足洗ひへよ可成候若日用人足遣申候ハ

ハ彌以せんきい多さ生老人若輩之者杖つさ杯可
被入念人足食給之儀ハ職人と一同よくせ御普
請之妨ニ不成様ニ尤ニ候事

一 普請場より木きき杯人足持出候儀可有之少宛も
大勢ニ而持出候而以之外費ニ成候間成程被致吟
味假令捨り申物成共少も猥ニ不成様ニ尤候修復
有之時分古材木杯運ひ申ニハ古木むさと可成候
間能々被入念指圖之所迄不紛失様ニを去ハせ置
べきくニ見計遣可被申候當分遣方無之古木ハ其
儘指置其相應ニ遣可被申候若朽損遣方無之もの

ハあぬり木ニ用候様尤ニ候事

一 大工木挽左官屋根菅其外諸職人ニ上中下有之候
得共作料飯米同前ニ付下之職多由ニ候間其段せ
んきいたさき棟梁肝煎ニ能々可被申付然共少宛
之上中下ハ可有之候間べきく相應ニ見計遣候様
尤ニ候自然一向細工不仕もの人数ニ入作料飯米
取申儀も可有之候左様之儀成程せんさく尤候又
細工よも不入精あそひ申職人ハハ當分過急を定
被申付其上以来ハ普請方江よせさる様ハ可然事
一 材木竹其外何ニ而も町人方より請取申時色々考

有之由候間宰領之者ニ能々入念可被申付候町よ
り御城中江之去以申時木數物數相違無之様ニ木
帳ニ付置せんき可有事

一可入儀ニ金銀米錢多入候儀尤候費成儀又ハ不食
議ニ而金銀多入候ハ、以來御勘定之節御吟味可
有之候間同心手代ニ至迄能々可被申付候事

右之條々常々無油斷入精候様ニ可被申付候以上
寛文元丑年六月

元禄十丁丑年閏二月廿八日

同上

按ニ本年九月尚又小普請奉行同組頭へ令文廿三條アリ
條旨大約前ノ寛文及本月ノ條ニ基キ互ニ増減ヲ為スモ
ノトス因テ彼ヲ
畧シ此ヲ存ス

覺

一 小普請方定小屋向後小普請奉行四人ニ而元方拂
方と貳人宛相分り候而小屋ニ相詰壹年宛相勤吟
味可仕事

一元方之奉行ハ諸色御入用之品直段等吟味致一職
人賣人共方より請取之元帳通帳ニ引合一日切小
押切判形仕御入用次第拂方之奉行之以書付印判
相渡一毎日元拂帳合雙方之帳面ニ立合之印判可

川
事
仕事

一 拂方ニ而も御普請御修復之木積諸色其場之奉行
并棟梁承届御普請輕重隨分遂吟味其上よて御入
用之品々元方より請取尤處ニ寄奉行江相互ニ以
印判請取渡仕其日切ニ帳志免可仕事

一 元方江請込候諸材木をまゝく小見繕木割寸間を以
拂之方江相渡拂方ニ而挽立置所々御用ニ相渡
右元方之木割寸間ニ法き合壹年ニ兩度程元拂可
相改事

一 日手間之大工木挽其外諸職人入用之人數を積拂

方より元方江申達元方ニ而申付職人等小屋江入
候節ハ拂方より人數を改其日切ニ帳志免可仕事
一 御納戸より相渡候紙蠟燭一月ニ壹度宛も請取置
所々御入用ハ拂方ニ而致吟味元方より右之品請
取之其場江相渡尤度々帳合可仕事

一 所々小屋より請取候品々其場之奉行以書付印判
拂方江差出拂方ニ而遂吟味元方より請取之相渡
候様可仕候手代之判形ニ而請取候物ハ追而其所
之奉行印判之書付ニ而引替勘定むをひ候様可仕
事

一所々より小屋江戻り候古木并殘物等其所之奉行
送狀ニ注之拂方江遣拂方請取之判形其場之奉行
取置候様可仕事

附古木并も中り物等一月切ニ拂方之奉行改之
其内御用ニ可立物ハ帳面ニ注之負數相改戸前
有之所江入置封印可仕候重而御用ニ立難き物
ハ役人共立合吟味之上御拂ニ仕總而小屋ニ古
木殘物等多不差置候様可仕事

一定小屋之内ニ番人相定置晝夜共ニ出入改入念可
申事

一定小屋之外ニ御普請之小屋場ハ諸事右之通
可相心得事

右之趣可被相守候以上

閏二月

寶永七庚寅年二月 關日
小普請方勤向達書

小普請方

右去丑年御普請大分之事ニ候間去年中之御用之
品諸事入念吟味可有之候事

年當年別而無據御普請之御用多臨時之御入用大
分之事 = 候其上諸役所共 = 御入用多段々御金相
渡候得共御拂金相滯候此後彌御拂金段々可相渡
候間其旨可相心得事

一向後小普請方御用之御拂金者當金可被下候間御
用等差支無之様 = 可被仕候且又小普請方前々よ
り諸事請負方之内當時之直段より殊之外高直 =
有之又者格別 = 下直成品も有之様 = 相聞候向後
彌以致吟味當時之賣買直段 = 引合高直成品者相
應 = 引下々又者格別 = 下直成品者相應 = 相増候

様 = 隨分入念可被遂吟味事
一 去年當年小普請方急御用共數多有之御入用大分
之儀 = 候間隨分心 = 及候程遂再吟味前方御入用
高志満り候内も御入用減候様 = 可被仕右之段々
各存寄共有之 = 付急度申渡事 = 候間此旨可被相
心得事

八月

寶永七庚寅年九月六日
小普請方改役人之定

一 小普請方役所近年者別而猥ニ有之様ニ相聞候向
後者小普請奉行方隨分心々盡一速心底々不殘遂
相談御普請之儀者勿論縱少々御修復等之儀成共
吟味致一御入用相改念々入可申事

一 此度小普請奉行支配江改役人新規ニ八人被仰付
候間御用向之儀委細ニ申合相勤させ可申候右之
もの共勤方鹿末ニ為無之誓詞前書相渡候間改役
之者ハ勿論小普請方始人足方末々迄も急度申聞
せ少も猥成儀無之様可申渡事
一 改役之内兩人宛小屋年番申渡置小屋之内ニ而役

長屋相渡壹年宛為引越晝夜共ニ無油斷所々江心
と附相勤候様ニ可仕候年番之者ハ翌年御勘定ニ
取掛無遲滯様ニ御勘定仕上可申事

一 前々より御勘定殊之外延引之事ニ候間年番之者
請取候月初より早速御勘定之儀心掛月々之御入
用高寄委細ニ認上御藏より出候品々別而御材木
石類等清帳仕上候内ニ引替手形月切ニ一紙手形
ニ引替總而手形數無之様ニ可仕事

一 總而小普請方之面々勤方善惡之儀改役之者共及
見及聞次第少も無依怙最負小普請奉行兩人ニ相

達候様ニ申渡候間改役申達候者兩人ニ而遂相談
其上ニ而月番江可被申聞候且又小普請奉行兩人
之内ニも若難心得儀有之候者壹人之同役江申達
候様ニ申渡候間是又少も無用捨月番迄可被申聞
事

九月

寶永七庚寅年九月七日

土木工造料仕譯書ノ儀ニ付達書

覺

一 御城中御普請并御修復等其外所々御修復所々寺
社御役屋敷且又所々之橋ニ右定小屋ニ而之御入
用諸色人足共ニ總御入用々書立内分けニ以多
總御入用之内金高何程者度々ニ伺相濟候分ト个
條々立書分け認差出可被申事
一 御成先之御用等其外先達而御入用金高難相極場
所者其所之御用ニ掛リ候小普請奉行小普請方入
念御入用之過無之様ニ遂吟味可被申事
一 御成之所其外所々若差掛リ急之修復仕候ハ
て不叶儀有之時相伺候而者間ニ合不申儀有之候

川
の、先御修復ニ取掛り追而御入用金高何程者何
々の御用个様之譯ニ付不相伺御修復取掛り相仕
廻申候段委細ニ書付月番江差出可被申候尤品ニ
より御入用積急々出来兼候儀可有之候得共先達
而見分之節仕様見分書無之候而者御修復等ニ取
掛り候事も成間敷候間右仕様書者先達而差出置
可被申事

一定式御入用之内少分成儀又者場所より不相伺
直ニ御修復候儀有之候、右之内入用一个月分
金高何程より个條と立書付差出可被申事

一御休息大奥吹上御庭御入用之儀右同前ニ相心得
少之御入用ニ而も積書を認御用掛り之御小性衆
御小納戸衆江指出其上ニ而取掛可申候若急ニ不
仕候て不叶御修復等之儀者右定式御用同前ニ相
心得御入用高不相伺取掛り候共追而相極次第高
何程と委細ニ書上其向々御用掛り之御小性衆御
小納戸衆江差出可被申候且又一个月之御入用之
高も右同前ニ相認差出可被申事
一總而一个月之御入用翌月者内分け目録を以其月
相勤候小普請奉行より月番江指出可被申候

川禁公坊
一御休息大奥吹上御庭御入用書付者竹田丹波守方
より是又月番江指出可被申事
右書面之通向後堅相心得可被申候以上

九月

享保三戊戌年五月廿五日

營繕持場ノ定

- 一 御本丸大奥銅塀を限り但大奥向者一紙繪圖ニ記
- 一 二丸三丸者内外御座敷廻り迄不殘
- 一 二丸御殿并塀重御門之内御多門御櫓不殘喰違御

門迄

- 一 下梅林御門上梅林御門并續御多門御櫓北跳橋内
- 一 二重御櫓北跳橋御門御天守御門乾御櫓御多門塀
- 一 西拈橋續大奥境迄
- 一 西丸大奥向不殘
- 一 西丸御裏御門より同所御春屋太鼓櫓并塀奥表仕切引戸迄
- 一 紅葉山御宮御佛殿御供所御寶藏并總御圍紅葉山下御門より御宮後通り御構塀山里境迄以上増上城中
- 一 寺安國殿總御佛殿并御別當本堂此外山中御修復

所々堂舎等濱御殿吹上御花畑月光院様御屋敷竹
姫君様御屋形壽光院殿宅法心院殿屋敷蓮淨院殿
屋形清心院殿屋敷御春屋高倉屋敷傳奏屋敷評定
所櫻田御用屋敷田安御用屋敷神田橋外御用屋敷
二九御用屋敷小石川町貳个所西九下御用屋敷御花
畑奉行預御用屋敷御厩御役屋敷五个所是者前々
御金御材
木等被下手前二而紅葉山坊主御役屋敷拾貳个所
仕候儀も有之候由
駒込御鷹部屋御茶園并御役屋敷芥川小野寺千駄
谷御藏屋敷駒場野塩硝藏竹橋御藏小普請方定小
屋深川御船藏番人居宅共是者前々御金御材木等
被下手前二而仕候儀も

有之由

以上引書。教令類纂

○陸軍奉行

累代武鑑ニ文久二年新規トアリ其列員ハ同年十二
月任スル大關肥後守已下慶應二年六月任スル小笠
原筑後守マテ十名アリ同年十月ニ至リ講武所ヲ陸軍所ト改稱
シテ此奉行ノ管轄ト為ス意フニ此際吏員モ移屬スヘシ然ルニ
累代武鑑慶應武鑑其跡詳ナラス且官司職務ノ達書類諸記之ヲ
見ス獨リ軍事諸奉行ヘノ總令ヲ得タリ行文簡ナリト雖氏晚節
ノ情狀ヲ畧知スヘシ其署名ノ首班ナルヲ以テ此項ニ收ム但此
局務ノ施行ハ尚數條アリ舉テ之ヲ第二十九章中ノ官廳此題目
ノ區ニ置ク
參詳スヘシ

支配向

陸軍奉行並支配組頭陸軍奉行並支配世
話取扱陸軍奉行並組世話役
正支配向ノ制度ヲ改
ニ成ル説アリ前

二第十五卷海軍奉行ノ題目
下置ク就テ見ルヘシ

文久三己亥年八月三日
軍事諸奉行ノ總令

陸軍奉行

騎兵奉行

歩兵奉行

御兵備之儀方今之急務ニ付而ハ鑊砲諸器械玉藥
御貯等ニ至迄取計方御委任被成候細事ハ伺ニ不
及海陸御備向掛之面々申談取計其段書面を以申
聞候様可被致候尤御入用筋ニ關係致候儀ハ御

勘定奉行同吟味役江も申談取計候積相心得御兵
備御嚴整相成候様厚可被心得候事

八月

引書 ○ 御書付留

○ 騎兵奉行

累代武鑑ニ載セス ○ 按ニ文久二年軍制改革ノ際ニ
與力總隊ヨリ抽テ騎兵ヲ團結ス其項頭ヲ置キ尋テ
奉行ヲ舉ク慶應二年ニ其團兵ヲ改メ幕下庶士ノ子弟彊健ヲ編
列シ騎兵隊ト唱フ此項佛國ヨリ教師ヲ聘シ其學ヲ傳習ス奉行
ト頭ハ前制ノ如クシテ其部ヲ統轄セシム然ルニ此項奉行頭ハ
ノ令書ヲ見サルハ簿帳散毀スルヤ但軍事諸奉行連署ノ者ヲ見
ル即前項ニ掲ク其他ハ二三ノ署務令條ヲ
獲タリ之ヲ第二十九章陸軍所ヘ合載ス

○騎兵頭

首卷此官名ヲ脱ス今之ヲ補フ○新規ノ制立ナリ設置ニ牽説アリ前案ニ其詳ヲ致ス

○砲兵頭

首卷砲兵奉行ニ作ルハ誤リ今之ヲ正ス累代武鑑ニハ之ヲ載セス○按ニ此職ハ文久二年軍事改革ノ際ニ設ク其始ハ大砲組之頭ト云フ後ニ砲兵頭ト改唱ス慶應年中隊士ノ變由及ヒ佛人ニ就テ傳習ノ件ハナリ騎兵ノ如シ其頭ニ關スル官令ハ舊記ニ逸ス署務ニ係ル條令ハ二三ヲ獲タリ即第二十九章陸軍所官辭へ收ム

○銃隊奉行

第四卷軍役ノ項ニ收ル慶應二年十月銃隊編制ノ達ニ此度御旗本之面々都而銃隊ニ御編制被仰出候トアリ其奉行ヲ置ク此項ニアラン後チ慶應三年ノ官名班列書ニハ之ヲ除テ奧詰銃隊アリ憶フニ此隊ヲ編列シテヨリ奉行ノ稱謂ハ歇ム歟當時ノ令條ヲ今存セス然レ氏其始メ銃隊メ銃隊ヲ編制スルハ右達書ヲ以テ確證トス

○銃隊頭

首卷此官ヲ脱ス今之ヲ補フ○按ニ銃隊頭ハ慶應二年十一月ノ職班ニ奉行ト次テ記ス是レニ依レハ此官モ又奉行ト同時ニ置クモノトス又慶應三年ノ職班ニ奧詰銃隊頭ノ官アリ蓋シ此隊ハ將軍近側ノ衛士ナリ之ハ類ヲ推シテ第二十四章新徵諸衛隊ノ項ニ收ム

○歩兵奉行

累代武鑑ニ文久二年新規トアリ此隊ハ旗本土族采邑ヨリ出ス兵賦ノ壯彊ヲ編制シテ歩兵組ト唱フ其詳ハ第四卷軍役ノ項ニ收ル兵賦ノ達書ニ辨致ス且此組慶應年間銃隊攻戰ノ法ヲ教師佛人ニ傳習シテ軍容嚴整ヲ増ス奉行ハ委任ノ狀ハ前ニ掲ル連署ノ總令書ヲ以テ知ルヘシ但其司職ノ令條ヲ存セスシテ署務ニ係ル數條ヲ獲タリ之ヲ第二十九章陸軍所へ合載ス

○歩兵頭

首卷此官名ヲ脱ス今補之○按ニ累代武鑑之ヲ載セス即新規ノ制ナリ之ヲ置クハ文久二年ノ軍事改革ニ際セリ

ナヲ騎兵隊ノ頭ノ如シ

○大目付

累代武鑑ニ寛永九年十二月任スル柳生但馬守ヲ始トシテ文久四年十二月任スル有馬出雲守ニ終ル○柳營秘鑑ニハ大目付三千石内ハ三千石高ニ被成下トアリ○官中秘策ニハ大目付五人三千石トアリ○按ニ幕府ノ立制ハ大目付目付ノ二監司ヲ置テ將軍ノ耳目ト為シ以テ政務ノ得失ヲ密告セシム而シテ其職掌ハ百揆ノ規則ヲ督視シ訴訟ノ屈枉ヲ暢達スルヲ司ル故ニ宰職已下ノ施行ニ於テ關セサル所ナシ姑ク二書ニ據テ其概畧ヲ舉ル左ノ如シ

支配向

萬石以上觸流諸國宿驛船渡守切支丹宗門改分限帳鑊炮改方關所物奉行○柳營秘策

寛永九壬申年十二月十八日

大目付勤方規定

以下二條皆同

條々

- 一 諸大名御旗本江萬事被仰出御法度之趣相背輩於有之者承届可申上事
- 一 對公儀諸人不覺悟成者於有之者承届可申上事
附諸事御奉公たての儀并不作法との承届可申上事
- 一 年寄中其外御用人并諸役人代官以下ニ至迄御奉公たて仕者又御うゝろくらき者於有之者承届可申上事
- 一 御軍役嗜之とけ承届可申上事
- 一 諸奉公人大小よらば身上不成もの之様子承届

可申上事

一 民法まり草臥候儀かと承届可申上事

一 不依何事諸人迷惑仕候儀於有之者承届可申上事

寛永九年申十二月十八日

秋山修理

水野河内

柳生但馬

井上筑後

寛永九壬申年十二月廿五日

天 覺

一 御用日よ其座江罷出善惡之儀可承届事

一 四人之もの兩人ツ、公事之場江可罷出事

一 御老中ニて誓詞致候者四人之もの參誓詞之文言

改判いたさせ可申事

一 誓詞仕候もの之判形四人之者改可申候但小身成

もの者四人之者宿所ニ而もいたさせ可申事

一 御旗本之諸人馬志る一差物組々の分仕置可申事

一 諸人分限帳并知行之國所帳ニ作置可申候事

一 海道筋制札廻るく成候ハ、改替可申事

以上引書。教令類纂

天和三癸亥年二月 闕日

覺

實子無之面々急病之節養子願之儀判本壹萬石以上ハ大目付衆壹萬石以下頭無之衆ハ御目付衆見被申筈候其心得可有之候以上

四八五子ハ西引書。御當家令條

時品ヲ進呈スル禮程アリテ傍ラ顯要ヘモ及スヲ以

天明七戊未年三月 闕日

諸藩程式贈物ノ儀ニ付達

按ニ幕府ノ制ニ諸藩主參勤在府ノ際ハ方物或

ハ時品ヲ進呈スル禮程アリテ傍ラ顯要ヘモ及スヲ以述職ノ表意ト為ス此條ヲ視テ往時ノ體ヲ知ルヘシ

大目付江

近來諸家之面々より御側衆勤表向御役人中江參勤其外御禮事等又ハ年中定式差定リ候贈物等仕來負數より省畧致シ又ハ品柄甚粗末成モ有之或ハ一向贈物ニ不及向モ有之由相聞候右ハ一己之音信贈物等トハ違ヒ上江附候勤品之儀ニ候得ハ左様ニハ有之間敷儀ニ候處取扱候家來共之心得違ニテ右之通ニモ有之哉向後ハ前々より仕來之

通贈物有之粗畧之儀無之様可被達候

三月

寛政三辛亥年八月關日

遠行他出入儀伺書

遠方之神社寺院等江參詣并下屋敷ニ罷在候一類
共方江罷越候儀心得區々ニ御座候間他役より承
合候もの御座候節挨拶不仕儀も可有御座奉存候
ニ付以来之儀伺置候様仕度左ニ申上候
一 明和二酉年別紙之通御書付を以被仰渡候處江戸

内外之所是迄と申場所相知兼候儀故心得區々ニ
罷成候差當引當可申御定も相見不申候依之凡御
曲輪内より四里内外之所江戸内之心得ニ而御届
ニ不及候様可仕候哉

但右里數之内ニ而も舩渡御座候場所者御届申
上罷越候様可仕候尤右之里數より相延候場所
者江戶外と相心得御書付之通相願罷越候心得
ニ御座候

右之趣奉伺候以上

七月

請書

書面右里數之内ニ而ハ御關所有之場所船渡有之所者御届申上其外伺之通相心得可申旨被仰渡奉承知候

八月十一日

桑原伊豫守
中川勘三郎

以上引書○御書付部類分

寛政三辛亥年八月關日
殿中日記調方達書

大目付

御目付

出役之者認候御日記之儀日々表御右筆所より請取詰所引拂候節又候御右筆所江相納候様可被致候

一 御日記都而調方之儀御日記方從御右筆突合ニ差越候節可成丈手間取不申様取調年々おくまニ不相成様可被致候尤御日記調方清書之儀も手間取不申様御日記方御右筆江も相達候間得其意可被談候

徳
木
録
考
卷
廿
六

大目付

四十八

陶
法
書

八月

引書○御觸書

天保十三壬寅年五月二日

譜代ノ者養子ノ議ニ付達書

大目付江

御目見以上以下者勿論羽織格者ニ而も御譜代者
之厄介子供之内御抱者之方江養子ニ差遣候儀ハ
有之間敷殊ニ寛政五丑年相達候趣ハ候處近來心
得違之輩も有之趣ニ相聞候御抱之者ハ其身限り

御抱入之儀ニ付既ニ養子と申唱ヘハ難成程之も
の江御譜代者之難有身分ヲ令忘却只一己之勝手
筋而已ニ拘り其身之不覺悟ニ可相成事をも不顧
御抱之者之方江養子ニ差遣候儀ハ御譜代もの之
心得ニ者有之間敷儀不埒之事ニ候以來右躰之儀
申出候ハ、頭支配手限ニ而承届候儀者難成申立
候とも前書之趣能々申諭取上ケ申間敷候若難及
分別子細も有之候ハ、各江申聞差圖次第可被致
候
右之段其向々江寄々可被相達置候

徳水 卷十六 大目付 四十九 同法

川
卷十六

四月

弘化元甲辰年五月十六日

家督跡目願ノ儀ニ付達

大目付

御目付 江

家督相願候者并家督未仰付候者最前進達いたし
候跡目願之趣相認可被差出候家督被仰付候者之
内御藏米取之面々未御藏證文不相濟者最前跡目
願書寫可被差出候養子相願候儀者尤未願不相濟

候分者最前致進達候養子願書寫可被差出候隱居
家督相願置候者未相濟候分者最前進達致置候隱
居家督願書之寫相認可被差出候

五月

以上引書 ○御書付留

文久二壬戌年閏八月廿日
登城乘馬心得方達

大目付 江

御目付

徳
木
卷十六

大目付

五十

陶
法
省

萬石以下之面々勝手次第乗切登城御免被成候得
得共年始八朔五節句并御用召之節は是迄之通可
被心得旨相達置候處向後は都而乗切登城御免被
成候

右之趣向々江可被達候

閏八月

慶應二丙寅年五月關日

銃隊調練ノ儀ニ付心得方達

大目付江

一 西洋銃隊調練之儀者外國之利器要術を採御國之
御武備一際御嚴整ニ可被遊御趣意を以先年中上
り厚く御世話も有之事ニ付右御趣意相心得勉勵
可致者勿論ニ候得共近来習練之道實理を矢ひ虚
飾ニ流し免角新奇を好む自己之工夫等取交遊戯
同様之舉動致し又者従来之御制度も不顧外國人
ニ齊き服を着用候向も有之哉ニ相聞漸々士風を
も破り且一躰之御趣意ニも相觸れ以之外之事ニ
候以来形容ニ不拘真實ニ修行致し筒袖陣股引之
類異様之仕立并花美之品一切相止都而陣服類替

古之外平生猥ニ着用候儀不相成候若心得違之
の有之候ハ、急度御沙汰可有之候條其旨可相心
得候

右之趣向々江不洩様可被相觸候

五月

以上引書 ○御書付留

○目付

元和三年正月ヨリ置ク○官中秘策ニ云フ江戸中武家持チ
辻番見廻リ諸士乗物駕籠御免願ヲ司ル柳營秘鑑又此乗物
ノ條ヲ稱ケ且其末ニ云フ五十以下者五个月切之神文五十以
者一度神文ニ而相濟願之趣者馬上計ニ而雖相勤痛斷之内ハ計
といふ字セ加ル陪臣も同斷拾萬石蓋合之家ニハ乗物願三人迄
不苦駕籠ハたと一拾挺ニ而も苦一〇〇らハ○按ニ目付ノ職掌ハ

大目付ニ隨從シテ勤旨大抵同シ其頒令獨リ萬石以上ノ領
主ハ及サ、ル而已此餘ハ大目付題目ノ下ニ置ク説ノ如シ

支配向

御徒目付組頭火之番組頭御貝役太鼓役
黒鍬頭御徒目付濱吟味役御掃除頭御徒
押御挑燈奉行表火之番御中間頭御小人
頭御駕籠頭御臺所番濱筆頭役

享保二丁酉年七月廿日

目付勤方并殿中宿直之達

御本丸勤 四人

本番加番泊リ共ニ相兼一日ニ四人ツ、ニテ御番可被相勤候

二丸 壹人

晝夜可被相勤候

西九泊り

壹人

右之通一日ニ御番人數六人宛ニテ可被相勤候二
九江御成御本九江長福様被為入候節御目付御供
壹人宛可被相勤候

但長福様御入之節ハ御本丸罷在候御目付壹人
相越御供可被仕候

一金銀吹直一御用掛御目付打込外御用掛のこころ
可被相勤候

但火事等有之役場江相越候節ハ非番壹人可被
罷越候

右之通被得其意向後可被相勤候

七月

享保四己亥年五月廿三日

曲輪内外破損所并掃除等見廻方ノ達

一御曲輪之内破損等之儀見廻申辱候掃除申付可
然處者心附可申候春秋三度破損等有之候場所者
早速向々江可達候事

一外曲輪者御目付兩人宛見廻可申候年中四月九月
迄之内者一个月ニ一度ツ、相廻り其外者三个月

川
禁
卷十六

防場 御目付 壹人 御使番 兩人

火口 御目付 三人 御使番 三人

都合九人

右之通相心得可申候總而御目付御使番共ニ都合九人外者何人ニ而も出火節御城江可罷出候事

七月

引書○教令類纂

寶曆五乙亥年三月關日

勘定所詰目付心得方ノ達

全體御目付勤方總躰御吟味事有之節ハ立會奉行
其外掛り之者不行届儀も有之哉ト有無相糺申上
候事候右之次第を以此度も掛り被仰付候者御勘
定所江立合日々心を附奉行掛り之者取締等之儀
相糺申上候様子との儀候然者右之外御勝手江相
掛り萬事之御用向手ニ懸ケ致作畧候之趣ニハ無
之候事

三月

引書○御觸書

徳
林
卷十六
目付
五十五
同
法
省

寶曆十一辛巳年十一月關日

修復場所見分心得方達

御城内外御櫓多門并橋其外傳奏屋敷評定所御厩
火消屋敷等御修復御入用積御作事方小普請方よ
り差出吟味ニ下ケ候節向後御入用積五拾兩以上
ニ候ハ、御勘定奉行より可相達候間何モ之内見
分被相越御修復仕様書之趣々以前々御修復有之
候年數承糺損等之様子仕様書ニ見合延置候ても
可然分ハ其段御勘定奉行相談可被申聞候
十一月

引書。教令類纂

寛政元己酉年正月廿二日

目付職掌ノ儀ニ付達

御目付と申候者御政事之御役ニ而御作法第一ニ
相守候儀ニ候御勝手向預リ候御勘定奉行等大目
付御目付御政事御作法之御役トハ兩輪之儀ニ而
有之候然ル處御目付之内ニ御勝手掛と申者有之
譯者御勝手向と御政事向と兩輪ニ而分リ不申候
得共御勝手向御取締宜ハ則政事之立行御作法之

正敷ニ而御勝手向之御不取締ハ御政事之闕ニ候
 間離きて不離もの故御政事御作法之御目付役御
 勝手掛りと申者有之事ニ候右御勝手掛りハ御勝
 手向御不取締無之様又酷薄儉約と申候て下々難
 儀致迷惑候筋有之候而ハ矢張御政事之闕御作法
 不立候間此所々厚可心掛候御儉約之儀者不益之
 御費無之様ニ致候の之之事ニ而有来り候品々半
 分減三分一減候様成事有之書面之上ニ而御益相
 立候様ニ而ハ下々迷惑難儀致一自分々々不足と
 補候ニ而如何共御趣意ニ相背候事ニ而利勘利術

即功を求候類ハ風俗之害ニ相成必今日之御益ハ
 明日之御損ニ相成候事有之ものよて候小家之儉
 約之法を以取行候事ハ尤不相成候必以利勘ニ落
 入候されハ物事寛大ニ過手重ニ過候得ハ不益之
 費と成御儉約之御趣意ニ背申候只今簡易と申候
 者事軽く手重ニ不相成候様ニいた一外飾不益之
 儀相止下々相應ニ立行難有大切之御奉公致候儀
 專要之事ニ候下々難有と申候迺其分限外是候儀
 寛大ニ過申候事ニ而者無之候是等之御趣意と行
 届候様心掛不行届儀者心付被申候事專一ニ候御

川
禁
卷一六

目付役御勝手役と混一候而者御趣意ニ相違候間
此事何きも承知之事たる處候得共猶又申聞置
候

正月

右越中守殿御書取

引書。諸御書付留

寛政元己酉年三月關日

殿中遣用諸具渡方ノ儀ニ付達

御目付江

總而御賄所御細工所より諸向江相渡候品々損候
得者引替相渡来候處近来相緩ニ候向も有之趣ニ
付以来御道具類者勿論鍔物瀬戸物釣瓶井戸車桶
類其外日用御勝手遣之輕き品々小刀庖丁幕等之
類ニ至迄損一候ハ其品差出候上引替可相渡旨
御賄頭御細工所頭江申渡候間右品々請取候向々
江書面之趣相心得損之品々者差出引替請取候様
可被達候

三月

德
禁
卷一六

目付

五八

同
法
省

寬政二庚戌年四月關日

町奉行所ノ事務へ立會ノ儀ニ付達

御目付江

平日町奉行ニ而吟味物有之節不時ニ御役宅江被
 相越暫之内罷在様子可被見候尤始終相詰候儀ニ
 者無之候手附之者も同様可被致候
 一御徒目付御小人目付時々牢屋敷江罷越牢問之樣
 子等為見可被申候尤牢問之趣意與力等江尋候而
 不苦候替申候來申候來申候來申候來申候來申候來
 一町觸之儀何ニかきら以相談有之苦ニ候尤格別差

掛急候儀ハ觸候上通達有之候樣町奉行へ申渡候
 間其趣可被心得候
 右之通坂部十郎右衛門井上圖書へ申渡候間可被得
 其意候

四月

以上引書。御觸書

文政十一戌子年八月關日
 支配向取締方ニ付達

御目付江

先達而黒鋏之者共御腰物方御用之御長持御用達
方江持參候於途中御側松平中務少輔供方と口論
致候始末遂吟味候處黒鋏之者及不法候ニ付夫々
御仕置申付候御用物之事ニ候間大切ニ可致者勿
論ニ而持步行候者共も片寄雙方除ケ合候得者過
失も出来申間敷諸大名其外御旗本之面々通行之
節者猶更心得も可有之處却而御道具之權威を以
諸大名御旗本之差構無之道をのち持步行或は途
中障ニ不相成者をもかさつ及不法候儀も有之趣
粗相聞如何之事ニ候御用物大切ニ心得候者別而

相慎聊かさつ不法有之間敷候若心得違之者於有
之者持人宰領者勿論頭支配迄も可為不念候間急
度可申付候此段御道具類并御用之品持運候向々
江可被達候

八月

引書。御書付留

弘化二乙巳年六月朔日
支配向ノ者へ諸家贈物ノ儀ニ付達

御目付江

御目付方支配之者共諸家より用頼ニ而贈物之儀
近來不取締之筋も相聞候ニ付以來用頼之儀是迄
之通居置贈物之儀參勤其外是迄贈候廉者御徒目
付組頭江相贈可申候若相對之相送候者贈物請
候當人者勿論贈候其家々江も御沙汰之次第も有
之候無據節ハ御徒目付組頭江承合候様可致候尤
只今迄濟來候分者不苦候間向後者右之通急度可
被相守候

右之通去々卯年八月中相觸置候品ニ寄銘々辨理
も相拘り可申彼是差支も有之哉ニ相聞候間向後用

頼之儀者御徒目付組頭江引合ニ不及家々之用辨宜
敷様可被致候尤右之通相達候由如何敷取計等者勿
論都而取締筋有之様相心得御改革以來之廉々不相
崩様可相守候右之通萬石以上以下共江可被相觸候

六月

引書 ○ 泰平年表

菊池憲一郎
同校
矢島椿齡

德川禁令考卷十六終

